

大単元「生きる -メメント・モリ (死を想え)」と、中学2年生の学び合い

松原洋子

中学2年生に様々な「人間としての最後の生き方」＝「死」を読み取らせることによって、敢えて「死」と正面から向き合わせた。教材としては、『平家物語』『葉っぱのフレディ』『想う』『心のバリアフリー』を中心に、新聞記事をはじめ多様な教材を用意した。その中に2時間の読書指導を取り入れることにより、『平家物語』の価値を再認識し、「死」を意識することで「今あるいはこれからの生き方」を真剣に考えるようになった様子を、生徒の作文・投書例から示した。よりよい学び合いの方法についても言及した。

キーワード：最後の生き方・「死」を読み取る・役割・変化・学び合いの指導法

1 はじめに

平成15年度に行われた本校の教育研究協議会において、私は「メメント・モリ(死を想え) - 『平家物語』を中心に -」という単元をつくり、実践した。一言でいえば、古典の代表である『平家物語』を現代の文章と関連させて読むことで、「横へのつながり」を持たせ、いろいろな意味で視野を広げさせようという実践である。特に、一般的にタブー視される「死」について正面から受けとめ、考えさせていくという重いテーマゆえに、さまざまな危惧を抱かずにはいられなかったが、あえて実践した次第である。ここでの実践結果は研究紀要にもまとめさせていただいた。

5年後の平成20年、『平家物語』の実践を行うにあたり、私は再び中学2年生と「メメント・モリ」について考えていきたいと思った。「命の軽視」という点では、中学生をとりまく状況は年々悪化している。今日の前にいる生徒たちに、是非「命」について考えてもらいたい。そのためにも、ほぼ5年前の実践を辿りながらも、アレンジを加え、よりよい教材や指導法について考察していきたいと思うに至ったのである。

2 学習指導計画

(1) 育成を目指す言語能力

- ・ 同じテーマについて書かれた古文や現代文を比べ読みすることで、人間としての生き方について考え、自分の意見を持つことのできる能力と態度（「C読むこと」指導事項エ）；
- ・ 古文の表現の仕方や特徴に注意して読むことのできる能力と態度（「C読むこと」指導事項ウ）

(2) 単元名 生きる -メメント・モリ (死を想え) -

(3) 単元の目標

- ① さまざまな文種の文章を重ね読みし、それぞれの作品を読み味わうとともに、共通するキーワードやテーマをつないで思考を深める。
- ② 文学・説明文・古文それぞれの文章に使われている独特の表現や文章構成を意識して読み、日本語への関心を深めるとともに、それらを自分の文章表現にもいかそうとする意欲を持つ。

(4) 単元設定の理由

現代の中学生(学習者)をとりまく状況は、大変複雑である。命が軽視されている時代ともいえる。なくなならない戦争・赤の他人による突然の不条理な殺人・少年犯罪(殺人)や虐待死・責任感の欠如から生まれた人災による死・経済的に恵まれつつも迎える孤独な死・インターネット自殺・TVゲー

ムや漫画などに多発する、人の命が粗末に扱われる場面・子供に蔓延する「死ね!」という言葉・核家族化などが進み、老いや死を身近に感じられなくなっている現在……。

戦争が終わり、経済的に豊かになり、寿命ものびた。にもかかわらず、充実し満足した生き方ができずに苦しんでいる人は多い。死は人生の着地点であるにもかかわらず、死はタブー視されてきた。なんとなく今を生きているだけで、将来の夢も抱けない人を見るにつけ、ここで改めて、死の意味を考えさせることは意味があると思われる。

死を語ることは、いかに生きるかを語ることででもある。死の意味を考えるからこそ、人は「今」を貴重に思い、生きることのすばらしさや他者とともにあることの意味を意識するようになる。学習者には重いテーマであるが、将来の人生設計を意識させるこのときだからこそ、命の尊さを再認識させるとともに、これからの人生をいかに充実させて「生きる」かを考えさせたい。

今回さまざまな文章を多読させる。文中にある「死を意識して生きること、充実した人生を歩むことができる」「人は誰でも『自分の役割』を持って生きている」などの言葉を、自分の生活・人生の中でも考えていってほしい。

また、たくさんの文章にふれることで、さまざまな日本語の姿にふれ、日本語への興味を持たせていきたい。なお、今回扱う『平家物語』は長い間人々に愛されてきた作品である。これにふれ、日本人にとって大切な文化財産であることを実感することが、国際理解学習にもつながっていくと考える。

(5) 単元の構成・テーマとの関連・配当時間など(全17時間扱い) プラス読書指導 2時間

単元	学習材	作者・筆者	文種	テーマとの関連性・キーワード	言語・表現	時数
1	走れメロス	太宰 治	文学	挫折・信頼・信実	短文・強調他	5 (実習生)
2	心のバリアフリー	乙武 洋匡	説明文	障害・他人を認める心・自分の役割	文章構成	2 (実習生)
3	想う	五木 寛之	随筆	メメント・モリ 人生・死・生きる意味	ナンバリング ・ラベリング ・比喩	1
4	デーケン氏の死生学	毎日新聞の記事	新聞記事	メメント・モリ 人生・死・生きる意味	ナンバリング ・ラベリング ・引用	1
5	葉っぱのフレディー心の旅ー	レオ・バス カーリア	文学 (絵本)	仕事・生・死・命・永遠・変化	平易・擬人化 ・比喩・言い換え	1
6	平家物語	作者不詳	古文	生・死・役割・変化(無常観)	語り・古文・対比	5
※	(読書)	平家物語の発展学習として1時間、さらに作文を書くための取材として1時間、合計2時間、約200冊の中から選んで読書をする。				2
7	作文	今までの学習を自分なりにとらえなおし、文章作成。入力して文集作成。				2

※ 第2単元と第3単元の間に、大単元の構成や教材間のつながりを意識させる学習を行う。
 ※ 随所に、今ある諸問題(地震・戦争・生きる意味や死について考えさせられる事件など)を 指摘し、新聞記事などを使いながら、学習と現実の生活とをつなぐ試みをしていく。
 ※ 第6単元と第7単元との間には、時間をおく。(生徒には取材をさせておく。読書もその1つ。)

この大単元は、古典の『平家物語』をさまざまな現代文と同列に扱い、テーマを追究していくも

のである。平成15年の実践では、『平家物語』の後に、諸・現代文を読む順だったためか、大単元のテーマに統一性が取れず、生徒は『平家物語』と現代文をつないで考えることができなかった。

そこで、平成17年の実践では、現代文を読み進め、大単元のテーマをつかんだ後に『平家物語』を読むことにした。その結果、以前よりも『平家物語』への読みが深まった。

本実践は、このときの実践をさらに改善させたものである。平成17年の実践では現代文と『平家物語』の読解が終わった後、生徒各自が資料を集め、まとめとしての作文を書くことにした。今回はその期間に2時間の読書指導を行った。図書館司書の方と連携をとり、200冊以上の本を集めて、授業で取り扱った以外の『平家物語』の本の読書に1時間、「人間最後の生き方を示す本」「命を考えさせる本」の読書に1時間を取ったのである。その後生徒各自が資料を集め、まとめの作文を入力し、文集を作って読みあうという流れは、従来どおりである。この読書指導を挿入したことにより、今まで以上に、生徒は『平家物語』に親近感を持ち、「古典」であるというだけでいざなぎがちな抵抗感が、例年以上に少なかった。これは成果といってよいであろう。

(6) 本時で扱う学習材名 『平家物語』より「壇の浦の合戦」

(7) 本時で扱う学習の目標

- ① 会話や人間の描写、情景描写を通して人物の心情を読み取り、人生最後の生き方を比較しながら読みを深める。
- ② 『平家物語』の持つリズムなどから、古文を読む楽しさを味わう。

(8) 本時で扱う学習材設定の理由

未知の事象との出会い(死を意識して生きることで充実した生き方をするという考えかたとの出会い)→課題発見(言語表現を辿ることにより、様々な疑問を解決していくことで、激動の時代を生きる武士的人間像をイメージ豊かにとらえていく。)→再構築された見方(今回学習した内容やテーマが、昔話だけではなく現実の自分の日常生活においても生かせることを知り、自分の「生き方」への意識を深くする。)という流れとなる。

なお、この単元は現代文(説明文・随筆・小説)と古文を共に学ぶ形になっている。

2年生は今回、初めての本格的古典に挑戦することになる。古文にこだわらず、さまざまなジャンルの文章と古文を読み比べることにより、現代と違う世界や価値観が存在していたことを知って理解を深めたり、現代と変わらぬ人間のありようにふれて古典と現代文のつながりを意識したりすることができ、視野を広げていくことができる。つまり、「横への広がり」を実感することができるのである。

古文は言葉や時代背景の壁が大きいですが、音読・暗唱学習を多用することにより、抵抗感を下げていきたい。

(9) 自己評価座席表(通称さりはか一ど)(ミニ・ポートフォリオ)について

補遺 教師から見て、1枚で学習集団の到達度・全体的傾向・生徒の実態が把握できる。これを毎時間積みあげることにより、ポートフォリオともなりうるので、ひとりの学習者の学びの軌跡を知ることができる。

生徒からみると、全員の紙面発言の場となるので、意思表示や意見交流ができる。また、お互いの自己評価を知ることになり、評価の仕方も学んでいくことになる。

(10) 第6単元の、学習指導計画(5時間扱い)

第1次 平家物語オリエンテーション(2)

第1時 武士の思想(死の受けとめ方・名をのこす・名乗り)、作者、成立年代、中心的思想、文体

第2時 語りの文学(「祇園精舎」と「敦盛の最期」の平曲鑑賞)、物語の概要、学習材の製本、系図の見方。

第2次「壇の浦の合戦」を読み取る。(2)

第1時 壇の浦の合戦までの物語の概要を知る。

第2時 壇の浦の合戦で最期を迎えた平氏の中で、「平宗盛」「平教経」「平知盛」の三人に焦点をしぼり、作品における三人の役割を考えることで、作者の意図を推測する。(本時)

第3次 その他の場面で、さまざまな武士がどのように、死を意識しつつ生きたかを読む。(1)
「那須の与一」「敦盛の最期」「忠度の最期」「知章の最期」などを読み、死を意識しつつ生きた人々の姿を知ること、自分の考えを深める。

(1) 第6単元の、評価規準

観 点	評 価 規 準	評 価 規 準 の 例
関心・意欲・態度	1 意欲を持って、古文を音読・暗唱したり仲間との話し合いに参加したりする。	B 繰り返し音読することで暗唱にいたることができる。 B 昔の人の生き方・ものの考え方を、理解しようと努力することができる。
読む能力	1 古文独自の表現の仕方や古文の特徴に注意して読んでいる。 2 古文を読み、その中にあらわれている人間・社会・自然などについての考え方を知り、自分の意見と比べている。	B 歴史的仮名遣いを意識した音読をとおして、古人のものの見方・考え方を理解することができる。 B 幾つかの文章を重ねて読むことにより、共通点や相違点を挙げるができる。
言語についての知識・理解・技能	1 歴史的仮名遣い・古文と現代語の意味や言葉遣いなどを理解している。 2 古文を音読することをとおして、文体のリズムや語感に注意している。	B 歴史的仮名遣いに注意し、古語と現代語との発音やリズムの違いを指摘することができる。 B 現代とは大きく意味が異なることばを現代語の中からさがし、理解することができる。

3 「学びあい」を活性化する学習

この大単元の学習にはさまざまなねらいがあるが、指導者側からの留意点の1つとして、生徒による「学びあい」の活性化を促進するような機会を多く設けることがあった。

ここでは、例として『平家物語』の第2次第2時に行った、「壇ノ浦の戦いにおける3人の主要人物が『平家物語』の中で担った『役割』」について学び取っていく場面を挙げる。(指導案は次ページ参照)

ここに至るまでの生徒は、既に大単元のテーマはおおむね理解していた。個人差はあるが、さまざまな文章を関連づけて考えようとする意識も生まれ始めている。古文の学習に入り、音読練習についてはほとんどできておらず、不足しているが、平家物語冒頭部の音読には意欲的である(その後、暗唱した。)平家物語や琵琶法師の時代背景についても、興味を持ちつつあるというところ。

「死から逃げるのではなく、怖がるのではなく、人生のゴールまでに何かを成し遂げよう、と人生の見方が変わるのを感じた。」という生徒の文章が語るように、新しい考え方が生まれつつある生徒も増えてきた。平家物語の中でさまざまな人の「最後の生き方」を読むにあたり、武士が死とどのように真剣に向かい合って生きたかを意識し始めた生徒が数人いる。死を美化することのないように、また肉親の死を経験した何人もの生徒の気持ちを配慮しつつ、授業をすすめていった。

① 学びあいを活性化する手段 その1 「一斉音読」「一斉暗唱」

仲間の声を聞きながら、ともに音読をし、ともに暗唱をしていく。協力しあうことで意欲が起こる。

② 学びあいを活性化する方法 その2「前時の授業感想」を読み上げる仲間に耳を傾ける。

前時の授業記録をとった仲間が書いた学習感想を、本時の記録者が読み上げるのである。前時の復習にもなるし、仲間の感想を聞くことで、自分の感想と比較することもできる。

③ 学びあいを活性化する方法 その3「自己評価型座席表（通称「さりはカード」）」の検討

前時の最後に書かれた「自己評価型座席表（通称「さりはカード」）」を読みあい、質問・意見・感想・全体の傾向を述べ合うことで、仲間と紙面意見交流を行う。

「さりはカード」とは何か。毎時間、最後の4～5分を使い、「授業への参加度」「授業の理解度」「今日の発見」「一口感想」「この1時間の中で心ゆさぶられた人（教師・仲間・作品の作者や登場人物）」を小さな紙に書き、座席表と同じ場所に貼り付けたものを、B4の大きさに縮小して配布したものである。1枚にクラス全員の考えが凝縮されているため、授業中に発言がなかった生徒でも紙面を通じて意見交流をすることができる。教師にとっても、この1枚がその授業における生徒の到達点を示す記録となるし、枚数を重ねる毎に、抽出生徒の思考の流れを追うこともできる。（これまでの東京学芸大学附属小金井中学校研究紀要に詳細を載せてきたので、ここでは割愛する。）

④ 学びあいを活性化する方法 その4「一人ひとりが書いたものを、席を立てて読んでまわる。」

壇の浦の戦いのラストシーンにおいて登場する宗盛、教経、知盛の中で、一番気になる人物について、その人物の言動についてコメントをノートに書く。つまり、一人ひとりが考えを書く時間を保証する。そのうえで、全員で席を立て、自由に仲間の作品を見て回る。何のために見て回るか、目的を明確にしておけば、生徒は集中して行動し、情報交換の時間も充実する。



⑤ 学びあいを活性化する方法 その5「氏名マグネット」

氏名が書かれたマグネットを、自分が選んだ人物の板書に貼る。こうすることで意思表示ができ、学習集団に全員の今の考えを情報公開する手立てになる。

このマグネットは、発言者を明らかにするためにも板書に貼る。こうすることで、学習集団の意見交流が深まるのである。

⑥ 学びあいを活性化する方法 その6「グループ活動」

同じ人物を選んだ者同士で、「その人物に関するコメント（言動をどう思うか）」「作者は（史実に反してまでも）なぜ壇の浦のラストシーンにおいて、宗盛→教経→知盛の順に登場させたのか。」「それぞれの人物が作品の中で果たしている『役割』は何か。」について話し合い、発表する。40人一斉学習の中で発表するよりも発言への抵抗感が削減し、話し合い活動が充実する。



⑦ 学びあいを活性化する方法 その7「音声発表（発言）」

すべての授業に当たり前に使用されている方法ではあるが、ここで大切なのは発言者よりも聞き手への指導である。なぜなら、意思表示だけなら発言以外にも上記②から⑥などの方法があるからである。中学生の発達段階を考えるならば、他者の意見に耳を傾け、受け入れ、それによって自分の考えを深めるといった活動が不可欠である。

⑧ 学びあいを活性化する方法 その8「生徒の思考をゆさぶる発問・授業の構成」

宗盛は生け捕りになってしまうようなふがない武士（の棟梁）である。優柔不断で情けないが、いざというとき死ぬ覚悟もないところに、人間味を感じる生徒は多い。それに比べて教経は壮絶な最期をとげる。ここに武士の理想像を見る生徒は多い。ところが教経は実は、もっと以前の戦いで戦死したとする史実もある。そこに、史実を曲げてでも壇の浦で最期を迎えさせた作者の意図が見える。もう読解できたと思っている生徒に、（壇の浦における）教経の死の捏造を告げることで、生徒は大いに動揺する。そして「なぜ作者は死の場面を改ざんしたのか？」疑問に思い、意見交換をしたくなるのである。

このように、1時間の授業の中に教師が「仕掛ける」意見交流の機会はたくさんあり、その影響

で、生徒は自然に学びあいを始めることができる。

4 作文分析

かつては日本にも死を向かい入れる「死の教育」や「死生観」があり、代々子孫に文化として受け継がれていった。しかし今は、それが断絶しているように思う。自宅で「生」を終える人が減り、病院で体を清められたあとの姿しか、遺族は目にしない。そしていつしか「死」を考えることがタブー視されるようになった。しかし、人間にとってもっともつらい、「自分(家族・仲間)の死に向かい、自分(家族・仲間)の死を受け入れること」は、いつかはしなくてはならない。これができるためには人間が生活する文化の中に死を受け入れる教育がなくてはならないだろう。

また、人の死を考えることは、「生」を考えることに通じる。誰もがまぬがれない「死」は、「最後の生き方」でもある。人間最後の生き方に注目させ、死を意識させることで、「有限の時間の中で自分はいかに生きるかという、自分との対話を真摯に行ってほしいと考えた。

そのためにたくさんの資料を用意した。作文を書かせる前に用意した新聞記事も入れれば、20以上は示したことになる。そして読書があり、生徒自らが資料を集めもした。結果的に、従来の実践よりも正面から『平家物語』と対峙し、『葉っぱのフレディ』や『心のバリアフリー』に出てくる自分の「役割(仕事)」は何かを考える生徒が増えた。

[生徒作品例1] 男子作品 題名 平家物語と死のイメージ

平家物語は、平氏の盛衰をテーマとした軍記だ。その後半には、平氏の武将の死に様が描かれているが、それは現在では考えられないような覚悟や決意、判断といった壮絶な内容である。それは、現在と平安時代末期～鎌倉時代とは「死」というものへの考え方が大きく異なっていたからと考えるが、この考えの根拠となる場面を2点挙げる。

1つ目は、平知盛の死に方だ。平知盛は兄である平宗盛に代わって指揮を取る平氏側の実質的な大将だが、最後の源氏との戦いである壇ノ浦の合戦において、平氏側の劣勢が確実になり、平氏のトップたちが入水し始めたとき、入水を嫌がって泳いでしまった宗盛とは異なり、知盛は一番最後に乳母子と共に潔く、しかも泳がぬように鎧を二着着て入水した。

現在の見方で考えれば、宗盛のやっていることが人間として当然の心理であり、むしろこちらの「命を粗末にしない、大切にす」といった行動のほうが正しいとされるだろう。しかし、ここではどうみても宗盛ではなく知盛のやっていることが武士として、人間として正しく、宗盛は単なる臆病者としての知盛の引き立て役でしかない。

2つ目は、平敦盛の死に方だ。この武将は一の谷合戦において源氏の武将に追い詰められたときに、敵から「お助け申しましょう」といわれているにも関わらず、「自分を討て」とか「さっさと首を取れ」としか言わず、潔く、ある意味あっさりとして死んでいる。彼もまた、現代、自分たちの目からすると、命を軽んじている、粗末にしている、といった感じになる。

しかし、わざわざこのような描かれ方をしているということは、当時平家物語を琵琶法師から聴いていた人々(=民衆)からしてみればこのような死に方こそが美德であり、またはあこがれだったのではないだろうか。現代と武士の時代との相違点は、戦いというものにあると思う。とすれば、戦いに参加し、もしくは巻き込まれて命を落とす、つまり惨めな死に方をするより、どうせなら死ぬときに良い死に方をする、という考えだったと考察する。この見方だと、後に宗盛が惨めな死に方をしていることにも納得がいく。

ほかに、現代にも共通する見方もできる。死を簡単に迎えるためには、それまでの人生を充実させなければ悔いが残り、潔く、格好よく死ぬことができない。そのために、一瞬や一秒といった短い時間を大切に過ごし、少しでも充実した人生を送れるようにする、という考え方もできる。また、この当時は寿命が短かったこともあると思う。

このように、いざという時のとっさの判断は、普段の時間の使い方にあるかもしれない。平家物語はそんなことを考えるために書かれたのではないだろうが、自分はこれを教訓としたい。

宗盛と知盛の対比、昔と現代の対比、ナンバリングやラベリングの使用など、学んだ内容・言語表現法をいかしている。

次に紹介するのは、「役割」というキーワードから自分の生きる目的を模索している例である。

【生徒作品2】 女子作品 題名 自分の役割 自分にしかできないこと

皆さんは、あなたの役割は何ですかと聞かれたら、どう答えますか。ある人は、学校での係の役割を答えるかもしれません。またある人は、わからないと答えるかもしれません。私は人生全体の役割について考えてみようかと思います。

私たちは、『葉っぱのフレディ』について学習しました。フレディは葉っぱに生まれ、大きな木のために働き、人のために木陰を作り、紅葉し、そして雪の上に落ち、木の栄養となります。つまり、自分の葉っぱとしての役割を命あるかぎり一生懸命にやり遂げています。

次に、『心のバリアフリー』を思い出してみてください。著者の乙武さんは自分も障害者として、障害者が健常者と同じように暮らせるよう、また差別のない世の中にするために、日々がんばって活動をしていらっしゃいます。これが「心のバリアフリー」で、それを広げていくことが自分の役割だとおっしゃっています。

あともう1つ、私が読んだ『こちら救命センター病棟こぼれ話』についてお話しようと思います。著者は救命センターで働く浜辺祐一さんという方です。救命センターには実にいろいろな患者がきます。思わぬ事故で意識不明になり、命だけ奇跡的に助かったけれどそのまま意識が戻らない人、薬を沢山飲んで自殺をはかった人など、どの人も重症です。しかし、全くの軽症の人もいます。浜辺先生は、そんな患者やその家族、あるいはまだ若い医者や看護師などをいつも励まし、支え、叱ったりして、人の命とは何か、医者とは何なのか、たくさんのことを教えています。医者は、人を救うのではなくて、自分自身でよくなっていこうとする患者を助け、よくなっていける環境を整えているだけ。あるいは、どうしても助からない患者を、いかにその人らしく三途の川をわたらせるか、それだけだと浜辺先生はおっしゃいます。

どうでしょう。私は3つの例を紹介しました。けれど、それぞれ役割が全く違います。たった3つの例だけではわからないかもしれませんが、役割は人それぞれ形が違います。つまり、私には私なりの役割があり、皆さんには皆さんなりの役割があるのです。誰一人として同じ形はありません。そして、どれも欠かすことのできない、とてもとても大切な役割です。フレディがいなかったら木が死んでしまうし、乙武さんがいなければ私たちは「心のバリアフリー」について知らなかったかもしれないし、浜辺先生がいなければ救われる命が消えてしまっていたかもしれません。このことからすべての役割がすべて必要なことがわかります。

しかし、私はまだ自分の役割が何なのか、正直わかりません。これから先の人生の中でいつ役割を見つけられるかもわからないし、100%理解できる自信もありません。でも、がんばって探しだしたいと思います。自分だけが持つ、自分にしかできない、ただ1つの役割を。

後日談であるが、8月から翌年2月にかけて、中学2年生は5社の新聞社に手分けして「投書」をした。テーマは自由なのだが、環境問題などに混じって、死生学に関する投書が多く出現した。生徒の関心度の大きさを物語るものである。その中で、実際に掲載されたものを挙げる。

【生徒作品例3】 女子作品 題名 新たな道 変化あって開ける

平成21年1月23日 産経新聞の投書欄に掲載された。

国語の時間で『葉っぱのフレディ』という本を読んだ。そのとき教室でも話題になり、今でも印象に残っている言葉がある。それは「まだ経験したことがないことは、怖いと思うものだ。でも考えてごらん。世界は変化し続けているんだ。変化しないものはひとつもないんだよ。」今、こうしている私も変化しているのだろう。

そして、死ぬことも変化のひとつという。「死」には何か恐ろしいイメージがあるが、怖くはないのだ。この解釈には、心に傷を負った人などの心に染み込んだりして、救われた人がいると思う。自殺を考えている人でもやがて「死んだらもったいない」と思うかもしれない。変化があるから新たな道が開けるのだろう。

「死は変化の1つの姿だ。」という考え方は、平家物語をはじめとする無常観にもつながる言葉であり、生徒の中に浸透したことばの一つでもあった。

5 成果と課題

- ①成果 教材の入れ替えと読書の挿入により、『平家物語』の理解、「変化」「役割」の意味が深まる。
- ②課題 まだ作者・著者の受け売りの考えにとどまっている生徒には、個別指導が必要である。

◎参考文献 東京学芸大学附属小金井中学校研究紀要 第38号 平成15年

「中学2年生は『人間最後の生き方』とどのように向き合ったのか」 松原洋子